

大八洲

JJ1SXA/池

「古事記」に記載される、伊弉諾(いざなぎ)・伊弉冉(いざなみ)の国生み神話で生成された、「大八洲」は、「淡路」(現在の兵庫県の淡路島)、「伊予」(現在の愛媛県)、「隠岐」(現在の島根県の隠岐島)、「筑紫」広義には九州全域をさすこともあるが、一般には「筑前」(現在の福岡県北西部)と「筑後」(現在の福岡県南西部)の二国、「壱岐」(現在の長崎県壱岐)、「対馬」(現在の長崎県対馬)、「佐渡」(現在の新潟県の佐渡市)、「大倭豊秋津島(オオヤマトヨアキヅシマ)」(本州)の8つの島から成る、我が故郷の佐渡ヶ島(佐渡の国)は、七番目に誕生したようだ。

演歌「水前寺清子」の「涙を抱いた渡り鳥」で、「今日は淡路か、明日は佐渡か…」と歌われている、何か、余り関係無いような気がしていたが、国生み神話に基けば、最初に生まれたのは「淡路島」で、「佐渡」も、大八洲の八つの中に入っているし、旅周りということを考えれば、淡路の次は本州では無いだろうと考えれば納得がいく、作者の意図は、どうだったのかは知りませんが、国生み神話は関係あるのだろうか？

ところで皆さんは、「大八洲」という歌をご存じでしょうか？

“神生みませる この国は 山川きよき 大八洲(おおやしま) … “

昔の歌ですから、内容に受け入れにくい部分もあるでしょうが、私は、「神生みませる この国は 山川きよき 大八洲」はすんなり受け入れています。

かつて「神の国」という発言で、バッシングを受けた大物政治家もいますが、「神の国」を政治利用してはいけませんが、自分の心の中に、我が祖国は「神の国」として持つことは許されるでしょうと思っています。

「豊葦原の 中つ国」は、略して葦原国あるいは葦原とも言うが、「古事記」「日本書紀」の神代巻がその典拠で、天つ神が天上の高天原(たかまがはら)より、葦の群生する地上の世界を指して、こう名付付けたことに由来している。

信ずる、信じないは脇において、神話の有る我が祖国は素晴らしいと思う、今、世界で、代表的な宗教と言われるのは、「キリスト教」、「イスラム教」、「仏教」で他にも色々の宗教があるようだ、

日本には、古来受け継がれる、「神道(しんとう)」がある、「神教」では無い、神道は、教典や具体的な教えは無く、開祖もおらず、神話、八百万の神、自然や自然現象などに基く多神教、自然と神とは一体として認識され、神と人間を結ぶ具体的作法が祭祀であり、その祭祀を行う場所が神社であり、聖域とされている。

聖書やコーランにあたるような公式に定められた「正典」も存在しないとされるが、「古事記」、「日本書紀」、「古語拾遺」、「宣命」といった「神典」と称される古典群が神道の聖典とされているようだ。

冒頭の、伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神は、別天津神たちに漂っていた大地を完成させることを命じられ、天の瓊矛(アマノヌホコ)を与えられ、天浮橋(あめのうきはし)に立って、「天の瓊矛」で、渾沌とした大地をかき混ぜたところ、矛から滴り落ちたものが、積もって淤能碁呂島(おのごろじま)となり、伊邪那岐・伊邪那美は淤能碁呂島で結婚し、大八島と神々を生んだという「国産み、神産み」という話にロマンを感じる。

神様を数える時は、一人・二人…では無く、一柱・二柱…だが、何故かは諸説あるようです。

大八洲(作詞:作者不詳 作曲:下総皖一)
神生みませる この国は 山川きよき 大八洲
海原遠く 行くかぎり 御稜威 あまねし 大東亜

神しろしめす この国は 豊葦原の 中つ国
瑞穂のそよぎ ゆたかなる 恵み仰がん 大東亜

神まもります この国は きわみもあらず 浦安の
大船しげき ゆきかいも とわに安けき 大東亜



国産みを描いた『天瓊を以て滄海を探るの図』（小林永濯画）